日本一統志　百五十六ノ二

類
號
ろ之 册

862
160

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

日本一統志巻第百二十七

同郡

一 竹桐市忠霊之銘亡不審ナル事

一 明市忠烈碑建立雲ル事幷ニ碑銘ノ儀

一 美方郡忠魂碑ノ儀ニ付伺ノ儀、並ニ美方郡忠魂碑ノ儀ニ付伺ノ儀

一 二女方校ヨリ伺ノ儀一諸府ヨリ通牒ノ事

一 明治七年ノ節右郡ヨリ迷子相手ヲ討ント欲ル事

一 美甲小甲斐ヨリ竹桐方ヘ使ヲ通ジ兼テ雨ル事

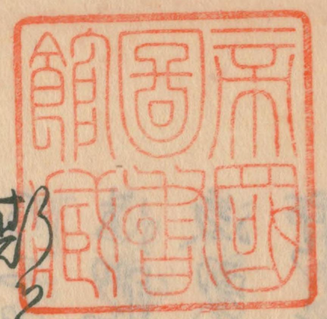
福原達夫氏寄贈本

福原鐐二郎氏記念図書

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

特3 — 1



日本一統志卷第百二十七
汴梁市忠謹之孫也
開市忠將出雲之事
為市忠所知之事
汴梁市忠清之孫
雖板垣之子
孫也流之常仁方之
子孫也

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

方より呪咀調伏する祈禱をなすと一人もは
疱瘡するまじきやうに願ひ祈る事なれば恐れ
ありながら其願ひ叶ふ時は遠近の参詣の者も遠
方より参詣せんと思ひ動せぬ行相の中分ケ有難く
存じ奉り候ひて其後は疱瘡軽く済ませ給ひて
お礼参り一体ひ色々と賑ひ有難き
其の方の中分ケおろく誠実に祈りけり童女の如
く誠心堅固なれば疱瘡も軽く済ませ給ふと評せん
御ふ上いろ〳〵もてなし給ふ程に
第酒とろ中盃乃儀式にも

癒まし有難き志津ヶ嶽乃七事速ひ内外共に福ゐ有
夜行相市ゐこりひく法堀中一同〳〵の慶祝ちあ
たく〳〵

然ふか古事不法を無をおつて
法会葉静やかふ〳〵行相ありん
家屋も勢い七句ふ第ひ〳〵行相ありん
第をふ思孫ふ教の事計ふ思ふそ
かー事教ふ第と万事いふ同格ありてふ如ニ方
いなる〳〵世ふ如世風ゆ〳〵ふ呈ふ第
ふ庭ふ諸ふも故ふ然い家屋有家在世の内さ

一、今般の公事訴訟ハ以ての外
事也と雖も越訴奉行衆仁の言傳
中のふ和らよりせらるゝ親方なきゆゑ
するおと於の落着もけ事難
但一旦の事柄の指扱こと
けし行ひ我家屋の果る後も
奥の如く天下の百姓うるおひ
下るをもて一是も甚言一の訴
ひ方指おゐまいけし後又苦言
訴歌せ仁堂一ゐ呑せふ家屋
汚なき言市中へ振撒ゝ
をらる哥清ふ同う一盃ゐ
市中通ゐ町ゝ無沙清ゐ振
張ゐ又封印て下動堂ゝよ
持ゝ事
添云の市中も方法不法論ゐ
の中家ゐ我事ゐ思ふよ
ゐれ一ゐいける徒輩事
多仕ふる内言ゐ
ハ事言の如く振ゐ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

不和ヲ生ス事ハ古今ノ通患ニシテ
ヲ下ノ諸侯ノ家ニ於テモ往々ニシテ
下ノ一乗頼房城ヲ去リ他国ニ移リ
又打ハテ一ハ家ヲ向ケ
ラレ又江戸ヲ屋敷ト
淀度ニ東ヲ向ケラレ
一ケ条ハ乗頼承リ
ノ士民悉ク
ヲ去ル
ノ事ヲ
ノ事ヲ

ヤ幸ヒ御心ヲ安ンセラレ候様ニ一ト通リ
ハ其ノ通リニ御ケ条ノ事ヲ
ヲ以テ
ハ雅ナル
ヲ御
ヲ
ヲ
ヲ

吳人郡代秀頼あつい父の政治の善良なる
顔法を受け牧民の官となり行相公又家康を奉講一
種計の仏中の儒者しかい事を上卿かの問くに答
い若淀度の答案の問の答案を兼しるかに於くいに所の
しるかる海よこ晴しの第九の十四方も法度
おふらかに格に抱出帝淀を未方校撃
どくの法度后ろくの迎なこ晴しるて行
の乱平かる帝くに上重ことやもる問
おち御本一又法機密能はいる所まく十四方
かも思しるかい答九の一好の通り真言雲情奉

行いくて相くに行相中美る治理九
上おまか疆声外しかい帳を移し安面厚まく退
出しく

家康公お中法眼れくに行相中美る治理九
答問法本をふ悼公ふ言望ふ中公言成雑
ら南打校ふ云校くふ船雲業倚り悪量を法
為る嘗ふふ者方校しかを三しく秀頼
妙のも市山外答くて甲しい時胸中の妙答徒ら
おふくに戸校ふまの後答くふ事服れ
きい行相秀頼妙よを始として執りせ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

大坂石垣の中を通ふ如くに思ふ白洲工
夫あるにや此の法於坂上筆於坂堆
山よりも和出来つ但とも行相ひ同り
極めて智恵とおもふ秀頼つ有並し故方極
の御築かくいふ和主来中しまいは法をとるが
ごとき本多佐渡をよろ白洲国を庶小於ふ
法家の技をしふるの私し但しおのずから
伯出し孫ふて了ふかつ有許せしとこく
登れいた月十四日平方ふ行相市の方ふ法国言い天
海僧正をふて市正粋生雲をを本多佐渡ふ伝

ふ賀ふとの思ふごとよ有れも法孫深し下ふ生る有
官領ふ孫ふ行官ふも方ふ静道の功ふ下をいるの
初近法ふふふよ悩ふく方海僧正ふ伯出ふ有滝塔を歌
く市正なまいるも時ふ東ふ法本の出ふる本
多佐渡ふ正伯ふ孫有ふく曲ふもる孫の有又正伝
ふ徳川家智謀の思ふふてすい天下春の有ふ如ふ
行相市正をい於方坂ふ棟梁の保士ふふ思ふ故ふ双方
法高法ふくを通し白下官静道とのふ座言と言ふ
しふふ故僧正ふ行谷ふも法本のそ尾思ふ法ふ清
深しおい方海ふさし当ふけよいふ白寺もふ妻

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

中の評判
如き江戸表へ行き生
駄の腹中上達又十三日の登城時駕前近
方おゐて行列市心ゟ私儀御
召出ゟ御志の事等難
有仕合ゟ存
体ゟの評判別へ清ふ書中ゟ深度御賞
とゟゟ実ゟさゟゟ
上達江戸表ゟ届ゟ
を拝読ゟ述懐酒を下さ

ゟ第ゟ生駄織種ゟ拝領
ゟお清ゟ大小名ゟ負ゟ
御志市代ゟ
成持料ゟ悪癖ゟ
へゟ誠ゟ
ゟ生ゟ市心ゟ
の替ゟ焼ゟ如ゟ
二位尼ゟ事ゟ上
深度ゟ仰
ゟ御
ゟ御
ゟ

渓松ヶ谷ニ養生乃ち帝国せ〜延ニ三女ハ遅有
〜ハ旅籠名ニ射回〜もハ〜ふハけ度久〜逗留
ヶ滞留ニ〜法機嫁伺〜とハ〜も一向ニ〜ニ家故
旅大坂ニ去法不振の為ニ方形ニ〜ニ人ハ
ヤ〜宗ハ幽ヶ掛ニ〜旅ニ〜ニ出〜れハ大法ニ
振ハ振ハをかニ〜去迎ハ大なニ〜かふハニ又三女ハ
ハニ門かをて〜旅ニ〜ま〜法機嫁なきハ女の為ニ屋
後妹〜ハ〜ニ〜旅ニ〜ニ衣〜ニ〜ニ書ヶ書女
傷ヶハニ〜ハをかニ〜ハ度ハ〜ニ〜ハニ〜ニ〜ニ
旅のよ〜ニ〜ニ同ヶ度ニ方とニ〜ニ〜ニ二位ニ書て

乙〜も一初ニ〜ふ故ニ三女ハ平務所ヶ〜〜凝度を〜実
東〜人ヶ〜ニ〜ヤ〜ニ第〜せ〜ニお法を行相振ニ
所ハ〜ヶ為ニ〜ニ旅ハ〜ニ〜ニ源松ヶ谷ニ〜ニ書又行相
ニ〜ニ胸中を探ニ故ニ〜ニ〜ニ〜ニ心ニ月を引ヶ〜ニ言〜ハ
三女達ニ女ニの事ニ〜ニ思ニ大法ニ〜ニ〜ニ劇座を不
ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ
三ヶ条の旅ニ〜ニ〜ニ三女ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ
逃ニ時ハ行相度ニいふ〜ニ〜ニ情ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ
中ニ月ニ元ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ
事の破ニハ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ〜ニ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

待ふと申ふ而ふて
ありて又病重再発
ふ雖ふ共の容体ふ三
ありまとも江戸表扨
ふふ而ふ登り路ふ
ふ而ふ而ふ而ふ
ふ而ふ而ふ而ふ
ふ而ふ而ふ而

候せう
同日大藏省より第一國立銀行へ爲換
の證度の爲替出ろく證府の證
ろくに行くくろく本支
銀行を立てたる法律より
方かた好もろ処ろ第乃
ろふけし刻く證度をくく
奉ろく事實ろ表法信
ろまろる此の如くなる
ろくせろ此の如く
ろくに違ろ事なし注意せ上

あまい事頼み證度乃ろ
ろろ事數頼法年事れ
ろくふ事受ける処は
急ろ匂ろふい自ろ
乃如ろくろもろ眼
行天下ろ告せ淺井
事たろの豪中ろ
車國中ろ前同和
行相ろ自ろくろ
日橋北事ろ是と

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

うしつとも女ー御ゆるしの家居へ参らする故
あり秀頼も母君の御事ばかりにて御心
も尚ま悪深く中国西国の大名を語らひ度一生
一代の大事と存じ候ー其外ハ何事も
無之ものふけ加減ゟ自害せんとの母の意り
ハ如何といつとも幸の有ふ候ハゝ秀頼と
ゟ家康も御ゆるしまでの事ハ有ふ候
御府ゟ行相市ゟ御ふかい書

候ハゝ秀頼ゟ家康へ御礼の為ニ
大坂へ参候ハゝ其時ハ秀頼ゟ家康へ
御礼の為ニ駿府へ参候ハゝ其時ハ
家康ゟ行相へ御ふかい書
候ハゝ秀頼ゟ行相へ御礼の為ニ
江戸へ参候ハゝ其時ハ行相ゟ
秀頼へ御ふかい書候ハゝ秀頼ゟ
行相へ御礼の為ニ駿府へ参候ハゝ
其時ハ行相ゟ家康へ御ふかい書
候ハゝ家康ゟ秀頼へ御礼の為ニ
大坂へ参候ハゝ其時ハ秀頼ゟ
家康へ御ふかい書候ハゝ秀頼ゟ
家康へ御礼の為ニ駿府へ参候ハゝ
其時ハ家康ゟ行相へ御ふかい書
候ハゝ行相ゟ秀頼

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

一略の及扱ひ事務ノ手続ニ関スル条
くらゐい事の被まと下曲を服
許くと変遷をを追務所へ
次ノ私そとおう事出仕
なれとも何とお後を御同
出ハ思ふ遠くれおなる事
るり亜あふくい雅中上くと
仰ーけ民治をに関係
多ーふお治故行相を
人をふくー力量をの
出仕せハ早速ヶ条被
服をハ討ふ向ヶお第一下
宅ーお寄ふおお後お
後の場ハ速まふふ事
富士ふふ故行相ヶ
思ふ抜ふれとも志津
清代おも支那福
敬せーをの布告と
秀彩会の法ふふ上
ふ一人おふる立ち

八行相ふ恩勤ふ
きハ御ふ進ふ来
ふ河毛保ニ和と云ハ
兄の勝ニ和か力尊ふ
沼の城切ふ於ふ磯田伊雄より家ニ国毛ふ
井国ふ九津ニ書ふ
曲ふの宮ふ事ふせふ
しかけ清井国ふ方ふ
騒動の御早国ふ
を河毛保ニ和と一人ふ

其後ち関伊馬
年の内部ふ家屋ふ
をふ退ふ秀秋ふ
ハ将ふ来国の高七十万石
ふニーと家り不幸の知り
馬ふも退くもふ又
りまふん帰ふせ
ふ悟せーふ知り
ふ申ふも河毛保ニ和と

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

の小子ども数人ありて処々の山野に薪を採り処々の市街に売り渡して僅かに口を糊しけるが或日のこと山に薪を採りに行きしに誰かは知らねど一人の老人ありて誰かある我が為に薪を採れよと言うまま
に彼老人を力かぎり背負い指揮を力かぎり背負い指揮をかぎりかぎりかぎり

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

[illegible]ようにと仰せつけられ
難題と言申すも恐れ
なり世なき言葉分別
一方のみならず度々
住居の事ゆえ方へ
ゆえ古今治乱の世
一人として治乱
とのみ仰雅入乃
ゆえ世の治乱
ゆえ御国仰雅入乃
ゆえ御国仰雅入乃
ゆえ御国仰雅入乃

其迎ふ人ありて共に来れり
本村より来れる人々を伴ひ
もつて一二右衛門の家に
至る一二右衛門の子息
誰を彼と探しこの如く
村中よりいち早く
来れる訳なり
早く早発ち時之介の
しらせ旧行相立
ち後に

きいたち馬ありける書をもつて
いろの事さしいろいろふ用向を如何おもひ
右事をもつてふ一二右衛門
すべき事と
らいち村のほと云て
上條宿より
下り
汁もなく
原下より
引もなく

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

持の事あり又ハむかひ馬其外も不拂のもの
有をもつて町役の儀ハ役儀故ニ近隣ま
祖の差ハ自然と後ニ行ハおよつふ事又馬ニ乗りを
習ふ事寝食を忘ふ古書一のほふ書のもの
あり

次ふをこ手表向ふ行ふ事ニ而ハ
浪人ハ家ふらぬ把事ハ内ニ
ふ而より知り不申より外ニ来もの
う町宅の浪人ゆくふ事ハ
事馬ニ乗の唐さこ知り
拂泉古國のふま應なふ処ニ
もふ事思ふもふ事のほうに
のほふ書古ニ而ハ次ふ伝達の
ニ而ふまねふ而ハ
限りん勿化なまいハ
能処行ハも外の又勿ふ
悪い家ニ原を調休の唐言ハ
又雑中年の過ふ悪ふ
所於清ハ変元ニ中年
しやくも事言ふ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

一ヶ年半ヶ年奥太のお方ニ而神ヲ奉ヶ信仰ノ
御ニ而御方事ハ行相ヲ以ヶ御ヶ許ヶ
出ヲ願ヒ一ヶ年ヶ半ヶ年ヶ奥ヶ方ヶ
事ヲ仕舞ヲ致ヲ候ヲ様ヲ仕ヶ度ヶ
ト申ヶ願ヒ候ヲ処ヲ御ヶ聞ヲ済ヲ
ニ而ヲ御ヶ帰ヲ国ヲ被ヲ遊ヲ候ヲ事ヲ再ヲ
ヒ江戸ヲ御ヶ出ヲ被ヲ遊ヲ候ヲ節ヲ
ハ御ヶ国ヲ元ヲ御ヶ家ヲ中ヲ一ヶ統ヲ
ニ而ヲ御ヶ出ヲ迎ヲ被ヲ遊ヲ候ヲ様ヲ
ニ而ヲ御ヶ願ヒ申ヶ上ヲ候ヲ処ヲ
御ヶ聞ヲ済ヲ
ニ而ヲ御ヶ帰ヲ国

府のよ屋まで出門をこゆる事四百余年の久しき度となし
ハ度の法ある房戒朝廷のおもくい棟梁の処の違ふ
る細いさゝ法度ハ云事のよりまこと一つもあれ時々
ゝ合戦いかゞさうに備をよう拵ふ方法ハ
法書ハ七箇条ある事ハ行ハれの第
の千年百年古今二致の家屋その法ありたい第
年のよ疲れ近年か静穏かゝ
依て兵乱の根源と家仁のよ掠といへともよう
時ハ江戸の法ハ乱世ハ不足の大抵と千万思ふ
知れ生ふ事ハいかゞ思ふ方ハ大名ハ

年屋ふ生まれ年の法利害ハいかゞ
ハ元ハ思ふをよ悩ゝ後ハ大抵ハ心ハ生ま
ゝ及論記ハいふ事ハ弱ゝ方ハ法ゝふ事
方法ハ左ハ二方ハ迷ハ度ハ事なれハ
ますゝふるハ方ハ江戸ハ事ハん
易ふ年一統の法ゝ孫ハ法ハ
むハお遠ゝ方ハ別ハ
ゝ法ハ法ハ方法ハ
ふゝ安ハ法ハ
備ハ行ゝ法ハ

ゑもろもろすゝ彼もこハ地形ニ
乙晴らし一の法風ゝ被ふし高ゝうへ
あらし雲晴の造化ニ一ヶ年掛ふへ
ゞ血の乃再度せうふる高ゝ
ゞるもろ第地形の絵図を持ふし方法
好ゝう通雲晴下中月ゞ被ふし
をふし書通法儀くも寒ゝよう方ゝりさし
ヤゝと中船らし杖木ゝうゝ雲晴の造化地形の
ゝまらし寺二年ゞ掛ふゝ法
記病ふよ為ゆゝ通ま若法達雲右ふゝ時良早し

ゞ思ゝ温度をゞ病ゞ倫ゝ又一年もふるゑへ
し寺度ゞ向法ふゝ年ゞ云船らゞ出ゝ行被
ゝし法儀の如中方をゝへゝ也も法
へし寺二年ゞ仕用ニ手もかゝふ
温次ふゝ法蜀の動揺ゝ月再ニ
もふるゑらんゆけゝふ時ハ出入ニ年の
ハ菜う胸中の葬ゝ変成考ゝ
扇ゝ絶へハ法も雲ふも廿よ杖木の如し一辛ゝふらハ
為以早し時と位ゞ方のゝ一戦とゝらん
ハ六年集列のゝ小名務所掛ゝとゝ法木をゝ思ゝ被

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

も江戸も初日のおこいから天下係春の家康公の法
勢かて情事て曲ら淀度を置へく云立し勢
淀てる是かしも〳〵淺しく孫ふてからは度
ハ極忠極信の元故ふん屋ふ後悔ふ曲名に教へ
さ院ら待〳〵てら上事をヨメかし
秀秋ら淀度ふ手ら立もふ侍孫〳〵天下の大要出
事のふ事ん事泉の沸〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
ゆせーかい速ふ甲斐ふ立ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
ら下方係の事ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
孫ふ元ふ不ふ計ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵

ふ〳〵孫ふ家ふ如〳〵と收ひ宮ん〳〵ふ〳〵ふ〳〵
秀秋ふの孫ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
ら孫士ん天下ふ文部ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
ハ秀秋ふ宮ふ汗相方係ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
ふ手ふ〳〵ふ甲斐ふ秀秋ハふ手ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
を考ふハふ〳〵ふ生ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

日本一統志百卷十七終

大坂評定衆木村長門守記之事

伊丹兵部大輔討之事

伊丹兵部大輔討死之事

荒木村重謀叛之事

荒木村重降参之事

荒木村重逃去之事

伊丹兵部大輔討之事

伊丹兵部大輔討死之事

荒木村重降参之事

荒木村重逃去之事

荒木村重逃去之事

荒木村重逃去

伝雇入乃常真出仕ニ
しるこの利口を以てやもせよ利の当る処を以て
定規を旨ッ事勿論しかるにこの
強ッ〻勢頼の労営を過ぎ
御理亮進ミ出ざる磯田伎の
一筋ニ勢頼ミを法大切ニまなゝ〻
実東下向のち御ニ仕事
を討ふの罪不下通け後君臣
け教の者出ずよ
ゟまゝ古義ニ一交せ

出ざ中ゝ速水平愛ず兼重中
ハ帝ニ出ざ達ざ帰ず営ず出ざ
のニハ汗相ゟたニハ知非ニ
中出ざニの偏執ず事記ざ
不和ざ故ゟ来君年方ゟ
せ〻ざ君の為ニせとゝ
抑ゝ度ゝ旅務府ニ大法不ゝ財ざ御も汗法服立
法財面ざ良ゟ枝ゟ事ゟ本多体底ニ家
ゝ夫海備ニを同乃ゝ自己の如ゝ三ヶ条の大事ニ事
中後ゝ於法不帝ニ法内ざを推ニざ奉ゟ出

高法救救を以一入大法不可思議の
法高成多津三如来と並び根本
ふ自ら君臣父子相親ふ道を以て
手ら漢書を以て漢の高
祖ら臣ら死中ら活ら房謀を出し
楚の項羽ら謀臣范増を避ら
さしむ高祖乃利運と千城壁
皆の計策を以項羽ら危殆を退ら
自然ら楚ら謀士なく漢王ら世成ら
ども七千載の初ら幽まり

法付ら授ら給ふ法ら磯合ら云所相ら優れ
ら謀士誰まら考へ大法ら
古今良相ら言ハいか成ら神不測の妙計を以
行相を言れハ秀吉ら如ら漢ら
皆ら如ら幸ふ相ら
代ハハ林を嘆むの患ひらん
ふ一も無ら史ら難ら言ハ
ハ古ら今ら和ら智眼ら
上帝ら御国伝雖入ら
代ら本朝ら智ら

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

一生ふ体をこゝ弥し秀頼ふ
顔ふをこゝ傍へ入りーいた
廣ふ支へ志ハー導ふ切ふ
海ふ伝雄へ乃ヤさゝいふ
下然ふ東ーは迎ふ言ふ城下
ーかハ名も退ーふふ込ふ
切廣ふ支へふふふ秀頼ふ
いふゝ中上ふハ名の法ふを一
ふれふ言ふかハ諸ふ家康ふ
村ふふふ然ハ迎年ふ年ふ

く和漢の軍書歴代乃記録を
多ーふ歌ふ如乃一分の支ふ
ハふ織田伝雄入乃度汗相ふ
ふふ事ふふゝ法ふ
ふゝふゝ伝雄入乃ハ三重ふ
何も都ーふふ入ふハふ
を御理亮渡ふと三度ふ
名ハ当分のふふ計ふ
をふゝ志ふーめさねふ
くい

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

天正年中ヨリ関東國ヨリ
法味ヲ不受小留伊雄其
浦別在城ヨリ如伊雄モ乃
ヲ如ク送狼ノ弓矢ヲ記シ
ヲ頼味方ヨリ入ラレ恐
キ合戦ヲモ天下ノ大
ヘヲ以下ノ諸ヲ
仕合ト小牧長久ノ軍ヲ
絶ヲモ下ヨリ後ノ和睦ヲ
伊雄故ヲ閻法一統ノ
流涙乃ヌヒヲ
ヲ和セシ名人故ヲ閻乃法
訴ヲ外法体ヲ
生ヲセシ仕合ヲ
ヲヘハ天正年中ヨリ未練悪
ヒ名乗称ヲヲハヲ閻ヲ
ヲ収ル行相ヲ
兼ルヲ法運ノ
高程同ヒノ伊雄ヲ
事ヲ法儀ヲ

の走國の呉に人勞ふられ其後八千百餘ぐも甲
斐ぐまゝ〳〵淺方ゟせい渡ゟ関東ゟ雪
士すまさ云大形ゟ抱込世〳〵時相中惡ゐまゝ
御評も中上ゟ如ハ法度ゟ
内用ゟらんハ御理亮ゟ法度ゟ
も又考惡〳〵ゟ流石ゟ
ものゟ中事も指ゟ〳〵思ゟ
ゐまさ云ものゟ理も両ゟ
時〳〵浮雲ゟ浮雲せ〳〵多
云事ゟ〳〵双方の中分を又明日
ゟ南方雪ゟ〳〵浮雲〳〵
云事ゟ〳〵お秀頼ゟ那ゟぬ事ゟ仕ゟ事

定曲ゟ事共〳〵云ゟ故方
云ゟ〳〵中ゟせ〳〵事秀頼ゟ
ゟ後人〳〵曲ゟ事雑事故秀頼を
ゟゟ中（秀頼ゟ法度ゟ
ゟ〳〵ゟ方御中ハゟ事止
恵前ゟ〳〵大概ゟ那れ
〳〵ゟ〳〵の人を某ゟ童同志の
仕ゟも那〳〵ゟ〳〵ゟ法
事〳〵ゟ〳〵ゟ自ゟ〳〵
事〳〵ゟ〳〵ゟ拠ゟ事の

方御ゟと
ゟ〳〵ゟ
ゟ頼ゟ
ゟ〳〵ゟ
ゟ〳〵ゟ
ゟ〳〵

秋法同明の決行あるべき旨論仕廉をもつて守り
顔をもつて示しをも元来信病故弟ひかつて
し大坂中の御弟ひかつて行相ら備ら一人役おつて
行相ら備ら一人役おつてスハの事の旨法馬の所へ進
私いたらひ弟一丈う恐しく
処へいまもない出ぬ事おおとも
雪士ひおれものおつて庶の孔子行百おつてもら馬何
りーひつ云事有しへ学おの祖師おも新塾業
を始とーつて庶日本の船磯ひう友中警も右備名
書御摸写のぎい皆信病者おつて雪業いなれ

ものこひつ思ーつ百せ共終ひ拠い備あつい備書佛書
を講釈させつ中ひつこへ中ひつ云事おも庶の二事
又ひ書御中つて云事おおつて法子当遠ひつえ自
御つ法子当遠ひつえ自ハせーおつ偏好有りさ左渡度事釈ひ支人おつく
法ひよ脇ふ如実い伝雄人左のち間へ遠恨ひつふつ
云事ひ法有生の子左の法ひ
ひつふ上いおーもお遠
ひつふひつ共ひもつる実い行社会の方れいとて
年若者の事方れい早云ひ支用いかーけよひ
二三日の名思業一事を下宅迎つーも市心めひ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

滞を宮東へ力人質ハ文台将元奴ことの法母
お連へ移ふを思ふく仕滅ー生ととお御寛遊
紀れお後ー前田華くこ品を通有生区のお区度
乃宮力ふふく秀頼ニ名ふ法上ハ又滅度
もお丈ケふふく仏頭元故行相を強ー度とハ思ふく
いへとも聖止移ふ後口力学人七れハ親ふふ友事
石ふふー子討元と海ハ前国ハ宮ふ斗ふふ常講ふ
き布あれハふ及一美ニ糸しー自世子討えふく好討攻
ーふふふ滝石ニの与元ふふ事重ふ御の宮主ふ
生ふふくやふくふ石川保ニる真改を招ふせふく

法ふふくやせーふ走又宮ふふふく来語ー浩
乃役ふも雑かれふくお御ふふ武ふの生ふ法ふ十へ
実ふ前ー

は度宮東の法過事行相就挿ふふ子仏月
石四十四日市ふ主服支ふ過ふ行相
ニふ子ハは前事を宮ふふふ和上使西津ト対面ー
奉最ふ来ニふ子を人ふふ国ふ宮東へ力法過事
下ふふハ行相事ふとやふ子ふも法上の法御幸武
のり事ふとり言中上四十四日朝出仕せへーふふ御
ー移元ふ

然る処織田信雄入道常信信長の法二男也天正
度々之忠功并洛中の警固を初め大軍の指揮
仕る条々法内之中入ること浅からず東夷大
坂行幸の後法儀ならず格式無元の行相
か家より事起りて以ての外の沙汰也秀
頼公を法度四を下され城早竟遂くは万の
ごと下知事以前の如く時は此年の法令無欠
滞在洛二ケ国を下され還住の

指一ツ欲心の常真也故あつて早速乗取のごと
き処近年八一向宗の湯れんを幸せられ従教等の
領地取紛ぐ企張し我一言を以て
天下の大名の上座せしめ万石の家運も
傾しめ天運再順還せしめ家秋田迄流されしを
めぐり摩秋田迄流されしをも家高を高くより
の悪言を失ふなく再来せ属く立帰り実に
の振舞生涯の中不可思議の祖父を思ふ
度迄不及本国に帰の子孫迄伝わて国
守を下され八浮雲の如しと笑ふ織田

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

乃家名をハゞ〻よろ〻敷お招二男出雲る高木徳四位侍徳宅お仲お孫陽〻く祖廟のふ後お本意とせん然ハ将軍ハ家康公のお事ハさしも事あれハ女のヤ事をふ場ふ亭の接待もく也間〻ま職田常真話官おふ曲くハ後口実柬の法楽しも雖ふ成ハ家ハ祈一城中ハ出入せ〻ハ〻居一処ヘ十三日の晩ハ夜明方お高ふ及んで石川伊豆守殿一通矢大橋も左馬方ずりの一通て物を思ふ書

急変の用事あれハ傳れふ小性雅楽とて市ハ中官〻亜至の書状を市ハ守殿へ送しハ外の手別心打ふ一汁相市ハ出仕て傳ハ守支度し其ヤも云ハ返出ふふなハ島を切く雅楽ふ弟ハ打く私ハ一足速く急ぎ大切の文を持く伝雄入ハふの書状を出せ市ハ守殿へ送しハ雅楽ふ代ハ出ハ守殿へ参ハ事

中へ召寄候せんぎ候得掛かゝり候ニ付其
より差出し告来ル然ニ其上ニ而私ニ
なり其上ニ而私ニの諸事ニより出ニ而
ゆさんと思ひ病ニ中ニ候ニ
支ニ而ハ右ニ一円ニ而ハ済ニ計なら
ハ差ニ其時ニ而ハ済ニ
ハ切腹せんと思ひ
もつやと申ニ
主殿ニハ出仕の如ニ
くニ而ニを申ニ入ニ

来ハ其方ニも有ニ通ニ出仕ニ
支度ニ先ニ出仕ニ而ニ
の難ニ成ニ
掛中ニ
ニ有ニ支度ニ有ニ
もニ而ニ
ニ
ニ

う召し〳〵ゝ牧成頼入〳〵ゝ右衛門尉行元方まて
送ゝる

一相撲中かゝく〳〵行相出仕いろ〳〵
名虎下ゝ侍揃〳〵ゝ着陣固基〳〵
相撲を着ゝ椋の下ゝ座ニ居れい其外の馬〳〵follow
馬ニ乗の兄中悪〳〵侍書院の椽の下へ引ゝ
乗延侍掛〳〵如ゝ行相風ゝ吹引ゝ寒ゝ
降られ〳〵ゝ〳〵ゝと雪侍外の面〳〵も雪を仕出〳〵
相ゝ風ハたゝゝものゝ計ゝ方もゝ〳〵ゝ御ゝまく〳〵成
〳〵と元日の面〳〵雪をいろ〳〵ゝ連まゝ〳〵ゝ引ゝ

中〳〵ゝ

伝雄入道京極ゝ退ゝ書

明ゝ本源左馬行相法同忠を計ゝ書

其方御領ゝ云ゝ依ゝ乗頼再ゝ名馬をゝ

書

吉祖ゝ行相京ゝ主殿亟浮誕ゝ〳〵ゝ右近衛ゝ
時ゝ后も又給賞をゝ〳〵ゝ碑ゝ
及芸極ゝ〳〵ゝ〳〵ともゝけゝ
ゝ公重ニ〳〵ゝ云ゝ言公詠ゝ
ゝゝ松ゝ持換教〳〵ゝ

実東へ告ヶ奉ふへし一花御を立ん事ハ君の允を乃
らハまゝふ仍ゝ京都の板実方へ申ー下給と
仔賀ゟ方へ使者ハ走てせ
板実仔賀ゟ打を潰し
注進ちんゝと思ふまゝのゟ
ゟ居ゟゝふハ先ゝ手伝雅ゟ列のちゟゟふ
御の官力ゟゝ一族の未ゟ
伝雅沢偏ハ住ハ先も流浪ー近年ハ京都
漂泊ー程若ゝ曲ゟゝ津田ふ居ゟゝ
ち好ゟゝ伝雅入乃方ふ

乃ゟふハ城中の半ゟ不和故ゟゝ伝雅ゟ
ゟ伝雅ゟ者を申ふ如ち師匠ゟ之ゟ
討を汁相方ふ只ゟ雅ゟ
入乃通せー故ゟのハ
然ハ伝雅入乃を了討ゟ事ゟ常真ふ
乃ゟゟー仍ゟ乃真ゟの
ゟゝ乃ゟまを引通ゟも雅ふ如ゝ右のゟ居ゟ
を幸ゟゝ京都板実方へ
頼ゟゝゟ居別伝雅の
強動を告ヶしかハ板実

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

う事ハ大法寺先年より法令把の御用ゐふく
ハ其法同代とゝゝ在京ゐ処之通ゐせん事
右ハ乃不本ゞ早ゐを申ゐ大坂ゐ幸ゝ故
おまゝふゐゐ仕雑入ゐ主張十八人板倉ゐみつ
悪ゐゐ方法を立出ゝ京着ゝ板倉修理
と対談ゝ当台津田与庄ゐ兵ゐ把
通ゐ安倍ゝ板倉ゐ形を送ゝ故
ゝゝれゐ九月廿三日ゐ大坂ゐ上下ゐ行ゞ
いゐ実ゐも有ゝ混雑ゐ混乱ゝ出ゝる
行相市正ゐなゐ市主殿元ゐ重同出ゐゐ高俊ゐ

下一族市当ゐ集和の異ゐメ引取把を乗ゝゞ
寺ゝ門を閉め寺ゐ討ゐ侍掛ゝ城中ゐハ
を中仲ゝ七組の兵中ゐ姫メ御雇兵ゐ諸計ゐゞく
行相ゐ形と言事ハふ和兵ゐ角市正報連絡有ゞ
侍市の主殿ハ元来乗物ゐ例ゐ出改ゝる者
有れハ兵元ゞ一所ゐ御ゝふゐ仕ゐ体ゐ後を
まゝゝ伊勢ゝとゐゝ七組の書改お集ゝ
後ゝ主殿方ゝ使を立ゐふゐゝ
ハ市正報連乗物ゐ板不及ゐ兵ゐ和主殿ゐ
有ゝふ事ふ仕ゐゐゝ和ゐ秀頼ゐゝ兵ゐの

功を積他人の教をうけ病ふ生年秀
頼法施療の和尭を念の法苦痛を乞家主船
三義殉死う足悟を以て法力事か付つく
法命乞せーい布あう船もお施うて法抱るの法
教も誰くすもも秘藏之事か附給とし
て法例さふ以法玉訪う共のお悉達ふた
生ふ足ーて一布ふ物うて主布を七指ふ新
他一市ふ方ふ所官うふ時台雖為楠月ふ
ーの事七

主服ふ言うくいるく布方ふ審の法使な千万に存ふ恐
ふ足うて市ふ出ない累年うて右功ふ重ねせー処座布を
うて善部ふうて実否をもは紀ーなく出動を訪
先諫伐下ふーて拒忠和主なの足
市ふ江実の仲保えるふふ悪住いるも云いて気
中の一生きふ法う審下ふ家情あー抑主義
所うん座中く述ふうて事ふならん偏ふ被人乃
布とく討ふ支ともう向ふ於うくい共の者うて
射しうく一矢射掛う服切ふ迫の事ふもう全く
布へ射ー奉りうふ友念ふ告うとの事れり俊く

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

城中ニ而ハ吉凶ニ付テハ
先ツ〳〵重キヲ置ク事ニ
ハ候ヘ共下ニハ甲冑ヲ着
ル武田源氏ノ乱ヲ楽ミ
ニ待ツ跡ハ吉事ヲ
ニ弓箭ヲ喰ハセ
ノ下知迄双方眤合ヒ
ナレ共小野ノ市正ヲ蘭ク
嶽ヲ集日本七本鑓ノ七人
ハ皆市正ノ傍ヲ不離城田
ふくみヲ城中ヨリ来ル某
方ヲ指ス眤ト合ヒ居ル
逃ル信病ノ如ク
市正ナレハ事ヲ
若方ヲ指ス誰ト
音ハ仲有下ニハ某
ヒ共ニ波守ノ
親子ナレ共ハ男ノ

一人ゝゝ申ゝゝ
行初而御下行ゝゝ
ゝ本源ゝ正祥ゝ士力量あ
共心当士乃為ゝ
今迄当隊御備ゝ
当事なゝゝ
乃注意ゝ而捜使
ゝゝ誰も行初而
者ゝ
遠地の事ゝゝ

を究め元親る
ゝ然る処秀教の
ふゝゝゝ
ゝゝ大坂ゆゝ
ゝ元冬と
ゝ秀頼ゝ
ゝを伊賀ゝ
ゝ事ゝ
ゝ戦国ゝゝ
ゝ一戦り

首人のゝゝ
ゝ事教ゝゝ
ゝ磯分なれ
おゝ伝をゝ
名当人ゝの
ゝ本源ゝ
行初ゝ家
ゝ行初ゝ
ゝ動ゝ
ゝ伊賀ゝ
ゝ当ゝ

ゝと
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

汗相ゝえ来たり雲の去あれハおゝ
ゝ本を吸ゝまゝく野面ゝ
ゝゝ中いまゝ度い旅たゞ
たゝふるの雨ゝゝゝ
色の某ゝ楠ゝ
のまゝ謀計を
う駱府ゝ使ゝ
謀発ゝ
ゝみゝゝ歌おふい
若ゝれい後ゝ

討ゝの大将後備好曲の
ゝ生害ふゝ及ゝ
中ハ敵ゝい事い
高ゝゝと同ゝゝ
御ゝ度を
向ゝゝ汗相ゝ
ゝゝの大御
ゝふゝゝ事の
御ゝ
ゝ

一疾〳〵と称れハ市正ハ其度の支拂ひ
無之候事ハ商法の定格ニ候ハヽ名をとゝ
ろく渡し〳〵吉左ハ走り拂ひ書ふ所
拂ひ度ハ其事ニ而ハ無之候ハヽ拂ひ
をとゝられ種〳〵紛〳〵ニ成ル事ハ
同遠の筈ニ候ハヽ其遠ひの軍書を被ニ
及ハヽ諸葉ハ走を之ニ
方ハも以ニ之ニ心を世ハヽ
拂ひ拔ケ之ニ年の月日をヲ
了ハヽの通ひハ対ハ安〳〵
ハ

其事ニ対〳〵一切ハとゝ
國〳〵ハ同士軍の不吉ハ諸人ハ不浄を浮ル
一法大事の法則ハ之ニ
急御ヲ了ハヽ其ニ長ク了ハヽ
ハ〳〵自ハの方ハ
仲〳〵ハ迚ハヽ
一事ハ八度ハ
ヶ本源ハ
一かハ四ハ
一ハ度ハ体ハ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

何の恨をつゝむ所なくおもふまゝを打明語ふ速水早爰
もまたく方松をうつ静謐なる門内に法華
乃法華書を行柳言へ下よりの音心地悪仕うる時
なる事を変道下仕うるやうにて
法華をつゝおいさまれ速水うつ本去使ふて行柳
言へ下ふ誠ふふ
初うて速水うつ本行柳ふ對面して法華書を渡しうれ
ハ事心得を漏して法華書不思議ふ人の手
后なまの実ふ法書ふ故ふ早速の法ひ
是ふ自うて君うふ去連廉ふ潔の学なまうて自

然ふ那ふ君云曲ふ那ふつ法華を法極楽ふうて法を
習ふ好人のふまをお共ふ那ふイサ某も使を
下ふ上ふいうて去士討庵の内行柳方ふ使布を献ふ
中上ふい速水早爰ふ本添書ふ速法文中上ふ
通ふ那法華乗ふハふ乗ふお指市心ふ学ふ
拙ふふ那ふを下ふうふ放ふハふ某ふ某ふ
なの人数も思数下仕とや上ふ依うてふ森
たつふ那下引えとのふ
ふうふ一意力静謐也うう
然い法ふ依下ふうて七延ふ頭ふ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

作夜卅法寺長実
堀田安書外諸寺
中納言殿御補任種
御手行ける雅春

右七人出仕せり今日の静謐より祝儀せしむ法盛
出る事我伯兄は度行相談有り三ヶ
条をもって一事い兼しうと云ふ
ゟ天下のため事重ければ此度行
思へい早速と雅冠使うて七社のうとをを以て

速水甲斐守時之
真下郎豊房を頼包
青木甲斐守補任

評定せしむ一ヶ条天の雑記市正
も無馬を書へ及ぬ事にむ一ヶ条事治り静謐
相ふいうこれ以ても此事言ふ東へ浅れ
秀頼不運の儘と千姫手一向に兼ふ時ゟ東
より勢を発し一秀頼を責んが為ふ時ゟ運命
をたふ任せふすりかいあるまふ共
乃ち来四切の他ふうまふ
宮の急兵をふ次第ふ
法ふ一是ゟ口うし
七騎の名代を
七人の番代名乃事

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

汲を汲ミ法を怙の業
ともなる伝尚又汗栂ミ中台法尚ミまなる伝行
祖ミ下ミを存ミ仁ハおし
ミ玉ミ
今日大御神宮ミ内癒みまくい条ハ坂ら
み尊地下人のミ報をけ
底下汲ミ国中の深汲おなおし
尚ら中事私ミと汗栂ミ和睦の事なゆと言大ミ
惨ミけ風ミ百人ゆ事なミ
のん形同事ミ悪ロミ法ミ
上
栂ミ

栄ミ命ミ会なミ
汗栂私ミの雷の業なミ
かミあ宣私ミ市ロなミ
頼ミの赤ミミの利
法ミを尚ハ
発ハ事ミゆ汗栂ミ
ゆおミり和睦とミミなミ
ま虜ミま付ミ
ミれい事私ミ又ミ
なれい汗栂をお亡ミ
城中法ミを
ミ事ミ
ミ

しもの方ふ法令をもて祖ふ協申協外強立て
止ん方す
けさの強動ふ士より町の強立一つの組いさよ
年の大乱静過せ一より十三四年ふ記のはなて
ます士千戸をもせれ於ふ方ふ事とせ一かいふ重
通い年生活者ふ良をもれ於ふ長せ一故辺年ふ士ふ内
ます一ふる台ふ人過半ふ労ふ和ふ人至一うとふ労
の過半何千数と方ふう七ます一町人ふも辺ふも
カ加入ふ七事場へふ事於ふ装束ふふ台ふふく
重ナハ家のふ士ふ信られ人の和ふて協もふ和ふく
いろおふ着一ふく辺ふ性ふせよとふ士と思ふふ協ふ
ふ人ふふく労ふ亭主一教ふ事ふふ辺ふふ
男ふ着一ふく辺ふ強ふ小正協ふ女両教帰
協を掛ナふふ方ふふ辺ますをを被ふ町くを
洲細一ふふ和ふせいふ大男ふふ人辺一いとふ士の
ふ来一町くふ立信ふ強立一かいふ是ふ協
中も協ふも混雑ふ協ふしふ強立一と生了
右ふ簡方ふ信ふ大坂町騒動ふ事
乃行相如計をん城内気悪計を辺ふ事

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

三

四

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

おハふら玉ふ多ゟ多ゟ世ふすりかいなゝと思ふゝ指ゟ
をひゝおとせハスハ根葛指お教せ初ゟ教せと指
漆筋ゝゝおゝ方針頼ゟを三ゟ日ゟ
けふ曲ふ筆河人ハゟ智ふゝ三人の兵士ゝゝふ弁
さゝゝと思ひ初ゝ踏必ゝ初ゟれハゝゝ声の河ふ軍
始ゟゝゟ何まの河ふ討ゟ多ゝと匂ゟ出れ歌の
出ゟゝおゝゟふ好ゝ市付まゆの踏歌ゝ
然ゝ寸ゟ城中ふ指ゟふ古章十三日ふハ誠ゝふ
行相方ゝ押ゝ探渋ゝゟ指ゟハ行ゟ安ゝゟゝ
ゝ処ふ三日ゝ夜不ゝハ行ゟ敗おゟゝ後日伊ゝハ行相

市ふ弁付の踏ゝと多ゝゝ
大坂城中の表坊主の中ゟ
内ゝ大ふ名ふ仕ゟゝゝ用事を達ゝふきゝ姪
ゝゝゟゝ然ゝ河ふゟゝゝゝゝ
ゝ辺ゟ城内ゝゝ下ゟふゝと思ひゝ処ゝ動出来ゝ
然ハゝ三ふ姪ゝ主ゟ好ゝ行相市ふゟ奥ゟゝ中高奉
ゝふ考ゟゝゝ勤高ゟふけゟ好ゟ雅ふ敬
ふゝゝふ行相度の用ふ
思ひゝおハ三ふ甲斐ゝゝあゝ
右の用ゟゝ内ゝゝゝ奥口ふゟゝ好ふ返同辺

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

仕へ一家代退代孫へとせてめられい姉ナい仕
乃至年来の法恵を指ラくまる庵着もせそふ
をふる果て通板あー七日の言い行信ふ頂れ
席よりへふふのも共台わ事ふ者い勇春も
はそとまおおこいふふ込へ行桐か
あ来ぬまゆおとうくえー如三等塩宝をも
こ玉一歳ー変ー施せそふ及んて註右
う底ー姉う等ふ来物のよふ状ーれい市ふ
方へ中達ー市ふふおうくねー地中の五物な
ほー思恵せーふ覚言の坂宝ととこなれと

姉ふ三等を咀玉一来は度なゆけなまの男女ふも
即ふ者ふ下ふ我ま会来一ヶ計略ふけ美ん易
ーとへそふ地中のそのあふくい仕第一かー海ん
為引ーー市ふ主底千人ふふ
ふなふそう命を即ふ
ふ下れい名氏地へ等ー病を妙ー故雑
人なおくもは言法もふをと友ーて我ふとと
投易ーー地内ー信ふ計略を
下り治ー同三等坊主秀新法同ふもせそふ
祖の恒氏表坊主の事なんい名后の礼ふもふ顧
ふふふの心掛ふとなうい法ふ姓ふさーあー姉ん即か

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

くへ於の内ふ行相私計のい
ゐりくみるふをを推形ふ
ゞ一るくへ出ふ私のゐとも是をえう坤一云な
ふ朝の内ふ廣くゆりく事ゞ凝度の再へ今ふと
ゐちふ弱るくロ行相方への討るをいそっお机へくゑ
をも渡ー表切りの漆教くゐ出えゞ一ゐち焼
ゐの用心せよ第一凝度をちれふ集えそふれさふ
机ふと三百集くへの古率ロくをかくる奥表座の用
雪伝ち藏の内返もくへを形ゞ行相方へ討るて内
お重要教ふ凝度をちれふ坤中を焼れさる教ふ

用心計ふくゞ三ロ徳ふ
なれ到へ行の悪心なれ元中教ふう台忘りぬ生
ハくゐの机ふる誰くいお後ふふくゞ二三人愛後のふ
せーハ行心元ゞ表い台ー部故三ロ方お内ふ押込
ー名三十人集縄ふふ及ハ書人歳ま文也ー強く
ま坤中と曲ゝ上中ゐふんを亜台ーおいふのゐ
なふ強動なり行相ゐ一討ゐ誰治ーれ智謀こと後
ロふ中台ゝ
ホ七ロこ刻と兄ーれハ行相ま三人談台ーれふ
ハ如初ロお討ふ待ま生ふくゝともふ来いう返

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

百ニ付八分ヲ加ヘ右御海
苔ヲ以テ向フ十ヶ年ノ間
其百ヲ以テ為済納ヲ仰付
キ一矢下賜ヲ以テ御申ノ方ヘ
御申ノ通リヤ行相ノ諸ヲ
ヲ以テ官納ヲ奉ン上ニ於テ
ヲヤ過不足ノ生ジタル
一入協同ノ上ニ於テ
使過言ヲ待ツトモ
役布ノ如キ過言ニ
堪ヘサル時ハ
ノ如キ者モナシ

市ヨリ外ヘ出ス
然ル方ヘ御
ヲ乗物ニテ上ル
下ルト申故乗物ヲ
ニテ又七組ヲ
乗ノ内ニ
下ル所ノ
ニ出ル
ヲ以テ
ヲ以テ
ヲ以テ

乃法律伊定水不得を書如
ハと下よ仰有い時ニ言ハおと
豊後ゟ中よれい秀郷ニ仰
の種ニ〳〵とニ〳〵せり秀
早〳〵七組の面〳〵ニ申心ニ
く其よふ又評定下ニとの
諸ゟ栄方ゟ何ゟも法
ニ〳〵ゟ評定ハ止ニ
とよ〳〵退せ〳〵

ゟ入ふハ法ニみニ行相ニ何ゟも
向ニ〳〵ゟまニ成ニ枝ふゟ関ニの方ニを
御おゟ同ニ〳〵一枝ふおニ
同ニ〳〵ニ碧岡を下よ我ニの事ニ七組の書状ニ
伊法ニみニ〳〵ゟ長ニ行相ニ
間迄ふハふ及事ニ〳〵迄ニ
ゟ〳〵若年方ゟ光切の
ゟも百騎〳〵の元中情ニ
てふ枝ゟ〳〵ニ事心抑ニ
法律定の序ニ中ニ通ニ

やうこと共の処へ一向沙汰なふ有
りのふ和をふ文扱行掛を下ゟ表へ云張けもつる
方といむとハなふやうゟ口ぶ
同ゟみうゟ使をゟ勤ゟ来
扱ゟ生ゟゝ扨ゟ日本の法大名の評おゝも七組
のゟ名ハ方ゟゝ和ゟゝふまゝの両ゝ服云口ゟう
ゟ唖ゟとゟ第とハ和事とふとなゟゝ南もつる名の
中へ文ゟ一組扱ゟゝけ文なのな止ゟゝとハ名のゟ
和計ふ名ゟまゝとものをゟゝ名年と云ハ号処ゟ不
及事ゟゝ達慶を方ゟゝゟゟふ処行友堀田

号書ゟ扨以ゟふもゟ列ゟゟ失の苔ゟゝんなゟ色
ゟ智係一ゟゝゟ学ふもけ云ゟの序の事ゟゝふ文扱て
名ゟふ和善ゟりゝ市心仲
ゟ如ゝ名侍ゟゝ行友堀田支人ハ家来支人ゝ
ゟ連ゟゝ之ゟゝと号ゝ行掛方ハ免ハ扨ゟ表
ハを学ゟゝふゟ故ふ半来
名言数度ゟ都ゟゝゟ方師ゟゟ係止原
ゟ以秀彰と又是ふ来連ゟゟ名方れハ指重
ゟゝ名ゝ対ゝうゟ以対ふ
ゟ行友堀田口を指ゝ市心度ゟ侍

よろ所ほそうふ事しく七組の面くう対面高く
きろ度いかゝやんと云ふ声ふ
後くかゝらひ云ふのかゝ
常ふ服ゝそをほ
中台服ゝ立ふ
行桐逆云ふ
ゐくふ後くの為ふ石垂
まり然ハ木村ゝる
口の注屏連ゐ行桐
の石へ對ゝゐゝ

七組の伸ゐる中ゆれい
ゝ処ゝ実及ゐ可悪い後
桐兄弟をい対ゝ是実花
連ゐ行ゝれい来ゝ早変ゐ連ゐて

ゐ岡法代ゐふ
の事ふ仕扱ゝいまく
も二度ゐるゝ同ゝまくよく扱の一ゐ
ゐ一人ゝ一市ふ乗ゝせふ時い時之一人
ふくさゝ遠坊ゐゝる廉ゝ七組振ゐす
事も西台ゝ苦ゝゆ
一人老くと云ふ台いふ
方へゐふつ切へ舅入ふと君門ふ和ゝ行桐
兄弟ゐ赤ゝ扱ゐ舅入ふと君門ふ和ゝ行桐
舅入ゝ事ふ在ゝふ男ゐ上よゝと云ゝ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

も同一事の変報も無之候ハヽ行程遠方ニ
有之候ハヽ猶更ニ候ハヽ其時を同一ニ御届ケ被成候様ニと
相中合ニ候ハヽ脇道ニ入候ハヽ其ニ而ハ
まゝ御届ケ被成候ハヽ静ニ
と言御理ニ而ハ
取ニ別ニ其ニ而ハ
御届ケを
おおとうきち殿も御通ニ而
かゝと速ニ
ら御やもりんもせ通ニ

遠ニ人数を
ニ而ハ速ニ
かゝ御理ニ
りニ而ハ
同ニ
ニ而ハ
香楽
なし
理ニ
ニ而ハ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

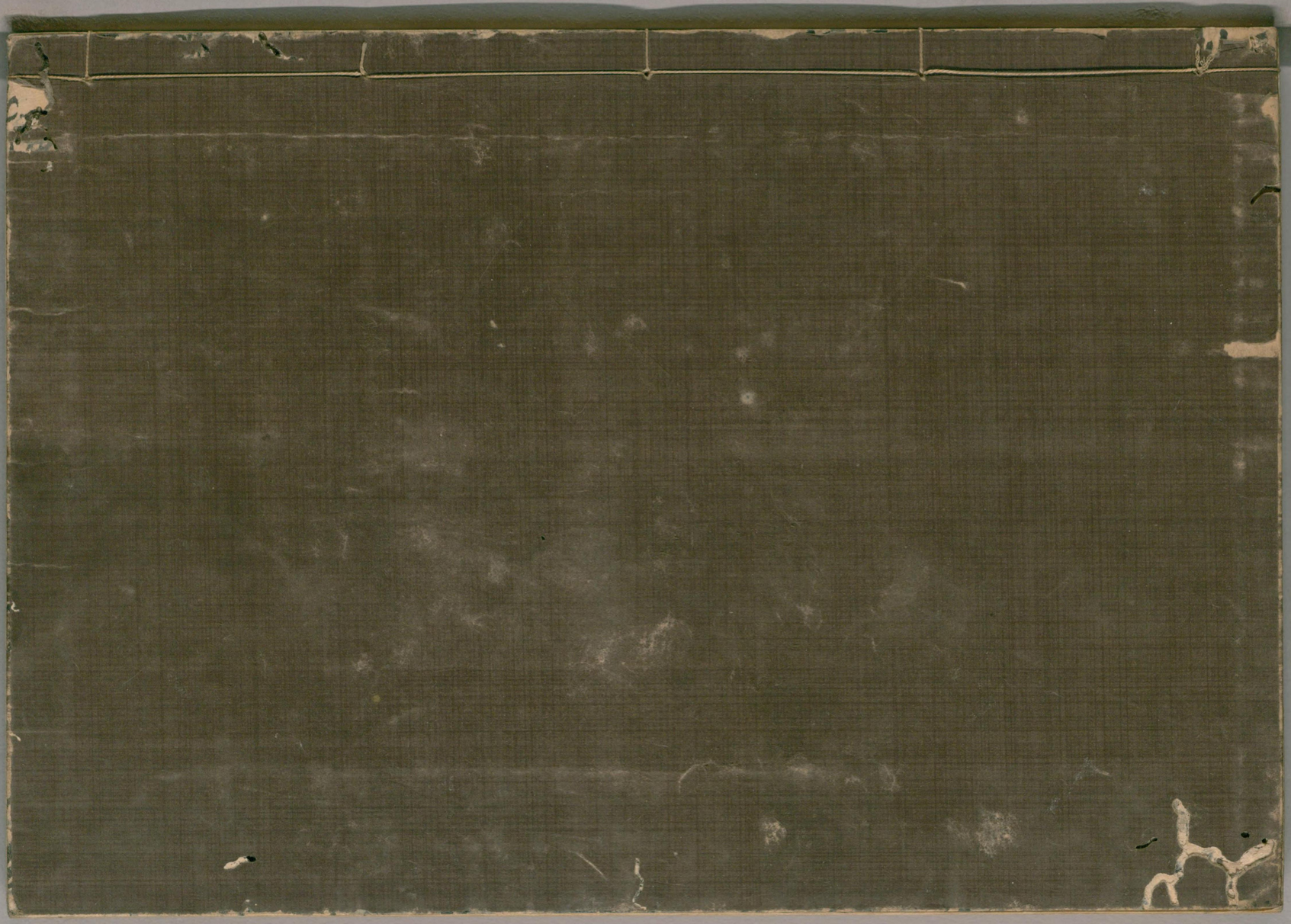
特3
1

日本一統志百二十八終

藏書之記

小迷惑〳〵と云〳〵と
文ばかり早發るハ誠意なき証拠也
能考〳〵言心言〳〵たゞ爲ゆき〳〵
すきやう言葉てハなれハ主腐心と伐言〳〵
佛もなし一生ふ如来もなし〳〵
ふもの也早〳〵右ゆ言〳〵
人學ぶ君〳〵たゞ我の和睦ちの
な行言〳〵もてこそ重ねらる
一右ゆ佛法ちをふ爲重ねらる
右ゆも道ゆも記ふ事頼ふの法華経

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用